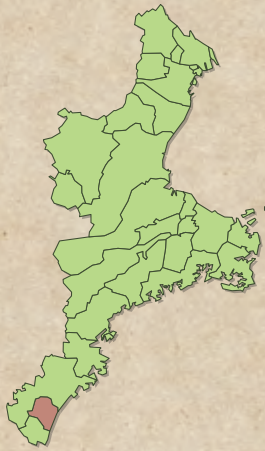


みはま 御浜町



- ① 峯弥九郎と紀州犬
 - ② 雲揚艦遭難地小松原と慰霊碑
 - ③ 引作の大楠
 - ④ 御浜のみかん
- 全域

0 5km

民話

御浜町

みねやくろう きしゅうけん 峯弥九郎と紀州犬

御浜町阪本には、「紀州犬発祥の地」という大きな看板が掲げられています。これは、阪本の鉄砲撃ち峯弥九郎が狼を助けたお礼にその狼の仔をもらいうけ、「マン」と名付けて育て、その「マン」が紀州犬の始まりとなったという伝説からです。ただ、「マン」は伝説ですが、峯弥九郎は実在の人物です。百姓としてのかたわら猟師として暮らし、戦があれば出陣するという生活をしており、鉄砲の名人で、豊臣秀吉が1592（文禄元）～1598（慶長3）年、朝鮮へ兵を出したときや1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いにも参戦したとされています。関ヶ原の戦いでは、西軍の石田三成側（豊臣方）についたために負け戦となり、味方のお姫さまを守って御浜町まで逃れてきますが、姫君は峯弥九郎が少し離れた間に自害してしまったという話が伝えられています。峯家の子孫は、この姫君の遺品の箸を形見として今も大切に保存しています。

紀州犬は、1934（昭和9）年に国の天然記念物に指定されました。もともとは、白・虎・胡麻のほかに斑のものも多く見られましたが、天然記念物に指定された以降、毛色の統一がなされて現在は白が主流になっています。



紀州犬（御浜町教育委員会提供）

■ 紀州犬や他の日本固有の犬について調べてみましょう。

歴史

御浜町

うんようかんそうなんち こまつばら いれいひ
雲揚艦遭難地小松原と慰霊碑

御浜町阿田和に雲揚艦遭難の慰霊碑があります。雲揚艦とは明治政府の軍艦ぐんかんの名で、この軍艦は、長州藩ちやうしゅうはんがイギリスより購入し、明治政府に献納したものです。艦の名前自体はあまり有名ではありませんが、明治時代に発生した事件に深く関係している軍艦です。

1875（明治8）年、日本政府が朝鮮に軍艦を派遣し、無断で沿岸を測量したことから朝鮮の砲台とのあいだで戦闘が行われました（江華島事件）。日本は、この事件を理由に治外法権を含む日朝修好条規を朝鮮に認めさせ、鎖国状態にあった朝鮮を開国させて貿易を始めました。この時、朝鮮沿岸を測量した軍艦が雲揚艦です。

雲揚艦は、江華島事件以前にも1874（明治7）年に起きた佐賀の乱（江藤新平を中心に土族おこした反乱）の鎮圧に出動した艦です。その後、1876（明治9）年秋の乱（山口県でおこった土族の反乱）を鎮圧に行く途中、暴風雨により阿田和沖で遭難しました。



雲揚艦遭難の慰霊碑（御浜町教育委員会提供）

- 雲揚艦にかかわりのある人物「江藤新平」「山本五十六」「斎藤実」や、関係した事件「佐賀の乱」「萩の乱」について調べてみましょう。

天然記念物

御浜町

ひきつくり おおくす
引作の大楠

豊かな自然が多く残る三重県南部に、紀伊半島で最大クラスの樹木、引作の大楠があります。県の天然記念物で、推定樹齢1500年、樹高31m強、幹周り約14m、枝張りは東西35m、南北42mの堂々とした巨木です。この樹は新日本名木100選にも選ばれています。

1911（明治44）年、明治政府が出した神社合祀令によって多くの神社がつぶされた時、その境内にあったたくさんの巨木も切り倒され、引作の大楠も付近にある7本のスギとともに切り倒されることになったそうです。しかし、これを知った博物学者の南方熊楠が、民俗学者の柳田國男と連携をとって伐採阻止に動き、2人の尽力によりこの大楠は伐採を免がれたといわれています。



引作の大楠（御浜町教育委員会提供）

- 南方熊楠、柳田國男について調べてみましょう。

特産物

御浜町

みはま
御浜のみかん

三重県南部に位置する御浜町は、みかん栽培が盛んで、200年以上の歴史があります。また、年中みかんのとれるまちとして、年間を通して豊富な種類のみかんを味わうことができ、県内第1位の生産地となっています。

この地域は、温暖多雨な気候と、水はけのよい土壌を活かした早出しの産地として知られています。栽培されているのは、温州みかんでは当地域で発見された「崎久保早生」を中心とした極早生品種です。

また、内陸部を中心に甘夏やセミノール、カラ、デコポンなどの中晩生柑橘類が栽培されています。

県内の産地では、東紀州地域とよばれる県南部（熊野市、御浜町、紀宝町）や南伊勢町、多度町などが有名です。全国では和歌山県、愛媛県、静岡県の比較的温暖な県で多く生産されています。全国の生産量を比較してみると、三重県は第10位前後です。【→P87】



みかん（御浜町教育委員会提供）

- 御浜町では、次のみかんが栽培されています。それぞれのみかんの生産時期を調べてみましょう。

（八朔、伊予柑、ぼんかん、早香、早生温州、高糖系温州、極早生温州、三宝柑、デコポン、セミノール、甘夏、春光柑、カラ、サマーフレッシュ、ハウスみかん、グリーンハウスみかん）

COLUMN

コラム

みかんはいつ頃からあるの？

みかんの原産地はインドとされていますが、栽培が始まったのは中国で、少なくとも春秋・戦国時代には食用とされており、『三国志』のなかにも、魏の曹操がみかんを食べたという記述がみられます。

日本の歴史上にみかんが登場するのは『魏志倭人伝』が最初で、『古事記』『日本書紀』にみかんの記述がみられます。このみかんは、日本原産の柑橘種「橘」のことを指しているといわれています。「橘」は食用よりも薬用として用いられており、『源氏物語』の中にも登場しています。

現在のようにみかんが食用として日本に広まったのは、「紀州みかん」が最初で、江戸時代に紀伊国屋文左衛門が紀州（和歌山県）から江戸に運んで富を得たことでも知られています。この後、明治時代から「温州みかん」が栽培されるようになり、紀州はもとより、静岡県・愛媛県でも大規模な栽培が行われるようになりました。



戦後の高度経済成長期には、みかんの生産は飛躍的に増大し、黄色いダイヤとよばれた時期もありましたが、1991（平成3）年に始まったオレンジの輸入自由化によって、栽培農家は苦しい立場となりました。しかし、各産地のさまざまな工夫によって日本の「みかん」は守られています。